

野村 勇 作

右から三つ目のベンチ

劇団こむし・こむさ 復活公演

2014年10月28日 6時30分

日暮里 d-倉庫

スタッフ

演出	野村 勇
舞台監督	飯島 正明
音響	市来 邦比古
音響操作	畔上 義夫<劇団蓮 (REN)>
照明	小村 利明
装置	野村 勇
協力	山本 修
	鈴木 純子
	林 ひろ

キャスト

囑託員平松	久松 健司
スタッフ今村	今野 好江
係長市原	市川 清文
係員中川	荘司 あや子
スタッフ野際	陶山 嘉代
黒いスカートの女	野村 勇
利用者	飯島 正明<元劇団民藝>

◆ 上演時間は約90分です。途中休憩はありませんで、ご承知おきください。

作・演出より 野村 勇

本日はお越しくださしまして、まことにありがとうございます。

43年の冬眠から突如目を覚ましたものの、当初は、どんな戯曲を上演するか決まっていませんでした。話し合いの中で、自分たちの生きてきた時代や経験を反映した芝居をやる、そのためには、既成の戯曲ではなく、オリジナル作品を作ろう、ということになり、書きまされたのが「右から三つ目のベンチ」です。

この戯曲を書いていたとき、私の意識の底のほうに、テレビの時代劇の1シーンが常に取りました。同じ武士の間にも身分の違いがあり、そのシーンでは、上士の若者が、下士の若者を道端にひざまずかせて道の中央を通っていきました。その時代、それは当たり前のことだったのでしょう。しかし、若者たち（特に下士の若者たち）は、果たしてそれを「当たり前」と感じていたのだろうか……と考えました。

もう一つ。すでに戯曲を書き終え、練習に入っていたときのことですが、アメリカの黒人差別の実態について、改めて知る機会がありました。その折りに、昔、といっても数十年前のことですが、黒人は水の蛇口も白人と別にされていたという事実に注目しました。この芝居の中で、多くのモチーフを使っていますが、その一つが「流し」でしたので、深く考えさせられ、今もまだずっと考えています。

43年ぶりに劇団を復活させ、皆さんにぜひ見ていただきたいとお願いしながら、改めて感じたことがあります。お芝居というのは、作者がいるだけでは成り立たないということです。見ていただく方がいて、はじめて成立するのだと改めて認識しました。

お芝居は「なまもの」で、とっておくことができませんが、見ていただく方々と作者が同じ空間、同じ時間を共にすることによって、なにか消えないものがほんの少しでも残せたらと願っています。

キャストより 質問 ①この公演への思い ②練習中の苦労など ③そのほか

久松健司(囃託員平松)

① 「43年ぶりの公演」……昔若い時にやっていた、1970年前後とは、時代の空気がまるで違っています。映画『真田風雲録』の歌の文句「こんなになるとはしらなんだ」です。

演劇も「反体制」風や「小劇場運動」風もなく、「東京働くものの演劇祭」など遠い昔話となっていました。何より人の働く環境が違ってきています。私の娘も一度転職すると、契約社員として非常に不安定な状況に置かれています。働く人が分断され差別され、格差が広がっています。

変わっていないのは、私の演技です。今回、主要な役をやるのは私が高校2年(65年)以来ですから49年ぶりで、当時と同じ野村演出から相変わらず駄目出しされ、あきれられています。

今野好江（スタッフ今村）

- ① 去年の5月、芝居を「演りたい？」と聞かれ、「演りたい！」と答えました。
でも去年だったら、出来なかったかも……。去年の9月に母が亡くなりました。
母から「よっちゃん、ありがとう。好きな事をおやり」と言われているような気がします。
私も母に「ありがとう」と言いたいです。

市川清文（係長市原）

- ① 集団的自衛権行使を容認する閣議決定が行われた日、作詞家で作家の、なかにし礼さんが、『平和の申し子たちへ！泣きながら抵抗を始めよう』と題する詩を発表されました。
集団的自衛権という政治的な問題にもかかわらず、読む人の心を揺さぶり、行動へと突き動かそうという強い力をもった詩で、今更ながら、詩のもつエネルギーに感動させられました。
私たちの芝居も、現実の生活や社会に斬り込むものでありたい、観た人に、現実生活への何らかの揺さぶりのヒントを提供できるものでありたい、しかも理屈を越えた感性、感覚の次元でそれができたら良い、そう思ってこの芝居に取り組んでいます。

莊司あや子（係員中川）

- ① 他の皆さんに申し訳ありません。何の準備も覚悟もなく、なんとなくここにいるみたいで……。やっと気合いが入ってきたみたいです。
② 45年以上も前のことで、セリフの覚え方まで忘れていて。最近は何覚えも悪くなり大変！一番セリフが少ないのに恥ずかしいことです。声だけは健在のようです。
③ 皆さんの気合いに圧倒されています。

陶山嘉代（スタッフ野際）

- ① お芝居をするのは、大学でのサークル活動以来ですから20数年(?)ぶりです。うまくできるかドキドキですが、観てくださる方に楽しんでいただけるよう頑張ります。

飯島正明（利用者）

- ① 忘れてた 遠い昔が よみがえり
② 四十年 経てきているに こりゃ何だ!?
③ それぞれの 四十年が 見え隠れ
我等みな タイムスリップ した如く

■音響の市来邦比古について

仲間の中で、演劇の道を貫いてきた一人。1970年代、小劇場演劇の黎明期にフリーの音響家として様々な劇団・演出家と共同作業を行い、1976年、劇団第七病棟創立に参加。
1969年から現在まで、プランナーとしてクレジットされた作品は500作品以上。世田谷パブリックシアターをはじめとして、北九州芸術劇場、まつもと市民芸術館など多くの音響設備設計に関わってきた。尚美学園大学などの非常勤講師もつとめる。
ごく最近の作品としては、永井愛作・演出「鴉外の怪談」（二兎社）、串田和美演出「K.テンペスト」（まつもと市民芸術館）がある。

■こむし・こむさって？

1967年（昭和42年）6月、一冊の文集が発行されました。謄写版刷りで、10人のエッセイや詩、小説が掲載されていました。その表紙に、表題として記されていたのが「こむし・こむさ」でした。10人は皆、その年の3月に都立墨田川高校を卒業した、元演劇部員たちでした。

「コムシ コムサ」とは、フランス語で「どうにかこうにか」とか「可もなく不可もなく」という意味があるそうです。その語感が面白くて、部活の中で使っていた言葉でした。

文集「こむし・こむさ」は一冊で終わらず、第9号まで続きました。寄稿する人も、演劇部員や同窓生に限らず、横に広がっていきました。そして、この文集作りの中から「演劇をやろう」という声上がり、社会人、大学生、高校生による4年間の演劇活動がスタートしました。

■過去の上演記録

- 第1回公演 1968年（昭和43年）9月8日 墨田区民会館ホール
三島由紀夫作「邯鄲」 演出 野村勇
- 第2回公演 1969年（昭和44年）8月31日 墨田区民会館ホール
榊原政常作「予告された心中」 演出 野村勇
- 第3回公演 1970年（昭和45年）8月30日 墨田区民会館ホール
宮本研作「はだしの青春」 演出 利根川澄子
- 特別公演 1970年（昭和45年）12月 墨田区青年館
野村勇作「天皇陛下のお引越し」 演出 野村勇
- 第4回公演 1971年（昭和46年）7月31日・8月1日 墨田区民会館ホール
八木柗一郎作「この小児」 演出 久松健司
野村勇作「天皇陛下のお引越し」 演出 奥住光利
- 特別公演 1971年（昭和46年）12月5日 墨田区青年館
チャーホフ作「幸福な男」 演出 野村勇

◇劇団こむし・こむさでは、つねに、皆様のご参加（キャスト、スタッフそのほか）をお待ちしています。一緒にお芝居を作りましょう！

◇連絡先 ☎090-6043-8303（久松）

Hisamatu@s9.dion.ne.jp

◇ホームページ <http://www.ichikiyo.com/komushi.htm>